つちもぐり。

まも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つちもぐり。

【Ｎコード】
Ｎ８８４７Ｌ

【作者名】
まも

【あらすじ】
思いついたものをぱぱっと書く３０分シリーズ

（前書き）

後味悪いので注意。

突然だが、俺は壁を潜れる。というか、今も潜ってる。
歩道脇に一定間隔で置いてある電灯の横で頬から上だけ出して通行人をもう見てる。すごい見てる。

潜れるのは壁だけじゃない、床だって木だってなんでもござれだ。
潜る、つまりは潜水、ヨーグルトのようにグニャグニャになってそこを潜れる。

息はできる。鼻で呼吸をするとなんか生きてるって実感できるから鼻でしてる。

ガキの頃に夏休みに友達と遊んでて田んぼにダイブしたらそのまま潜れるようになっちまった。

びっくりだよな、鼻水垂らす馬鹿なガキだったのに一変してなんかよくわからないガキになったんだぜ。今はオッサンだが。

壁を障壁と感じさせないでスルスル行けちゃうからそりゃもう犯罪しまくり、そう思った。

手始めに近くの女湯でも覗こうかな、と思い。行ったのはいいんだが湯船に顔出して鼻から思いっきりお湯吸い上げちゃってな。
痛いしなんかにがいし、涙出るし苦しいし、涙出るし鼻痛いし。
もう散々だった。

そんなんじゃへこたれねえ俺は次に銀行の金庫に忍び込んで有り

たっけ金を奪おうとした。

すんなり潜入はできたんだがな、持ち帰る時が問題だった。出ないんだ。

壁の中に潜れるの俺だけでな。他のモノは持ち込みできない。

こう喋ってる間にも俺は全裸だぜ。言わば地球が俺の衣服だ、スケールでけえ。

で、だな。色々あって今は犯罪をしようとは思わなくなった。あ、でもわいせつ罪にはなってんのか。

まぁいい、犯罪をしようとしている内に、手を染めるのは愚かな人間だって気がついたワケよ。

普通に考えて楽をするのに苦労するなんて、たまったもんじゃないだろ？

だからこうしてふよふよと漂ってんだ。天気が良いと尚更気持ちがいい。

そういえば、同じような晴れたある日にな……

いつものように近所の公園で土潜浴を行う。日差しが良い日は数倍心地が良い。

眼を閉じて地面に身を任せて漂っていると、突然黒い何かに日差しが遮られた。

「ねえ、オジちゃんはいつもそうやってるけど、お仕事はなにをしているの？」

「あ？いつもって、おめえは今日初めて見る顔だけど俺のこと知ってんのか？」

ガキ。女。服装は白いワンピースに麦わら帽子被って赤いランドセルを背負っている。

一目見た印象は普通に可愛い。学年は小学3年生ってとこだろうか。しかし子供はどうしてこうも綺麗な瞳をしているんだろうか。

が、可愛さは別として、今は絡まれるような気分じゃねえ。失せろ。

ここは公園だ、近くに砂場もあるし、くるくる回して遊ぶ遊具やジャングルジムだってあるじゃねえか。

そこで今遊んでる奴等と戯れてくれればいいだろうがよ、こんなオジさんと絡むよりも。

「あ、今オジちゃん私のことガキっておもったでしょ。ウザイっておもったでしょ。」

思った。

「なんだ、お前俺の考えてる事がわかんのか。」

「ううん、だれに話しかけてもみーんなそういう反応するから“かま”かけてるの。うふふ。」

笑った。笑顔がこれまたかわいいな。

「カマかけるなんてよく知ってるじゃねーか。」

「ご本読むのすきなの。」

本、ねぇ。俺はさっぱりこの能力付けてから気味悪がられて誰とも付き合う事もなくなり国語は中学で止まってんだ。

その点、この年齢で頭が良さそうなのは羨ましいな。俺は、少しなら付き合ってやってもいいかな、って思ったんだ。

「で、あっちで遊んでる友達とは遊ばないでこんなオジさんに何のようだい。」

「友達じゃないよ。」

「そうか。別にお友達はいるのか。」

「ううん、ちがうよ。」

あ？なんだ？

「…そうかい、深くは聞かねえさ。」

「あっ、オジちゃんやさしいんだね。いっつも私“いじめられてるの？”とかしつこくきかれるのに。」

…優しいんじゃねえさ、思い出したくねえんだ。俺をな。

「オジちゃんは伊達にオジちゃんやってねえさ。」

「へぇ～。かっこいいね。」

「こんな顔だけ地面から出してるやつがか？」

二人で笑いあう、なんか、潜ってる時より心地いいな。

「あ、もうこんな時間。おかーさんとおゆはん食べにいくからまたね。」

「おう、待ってるから暇だったらまた来い。」

そう言って別れた、パンツにクマさんが描いてあった。
そういえば名前聞いてなかったな、まぁいいか。

翌日、またいつものようにふよふよと公園を漂っていると近くに居た主婦のひそひそ話が耳に入る。

「…さん家のおかーさん、成績が悪いからとか言って娘さんをよく虐待してて、ついにやっちゃったそうよ。」

「あらやだ…、…ちゃん、まだあんなに小さいのに。」

物騒な話だな。

「昨日は近所のレストランで見たって人がいたけど、どうも最後にだけいいもの食べさせる為だったらしいの。」

…ん？

「あらやだ…、…ちゃん、かわいそうに…。」

「ほんとよねぇ、麦わら帽子が似合うカワイイ子だったのに…。」

おい、待てよ。

「…病院ってとこに運ばれてそのまま亡くなったらしいわよ。」

場所を聞いてすぐに体が動いた、たったの一度会って数分話しただけのガキの処に行くために。
必死に土をかいて前に進む、そこへ進む。
辿り着き、小学生が十数人立っていたその部屋を見て確信した。
そこだと。

まさにそのガキだった。名前も知らないガキ。
潜ってる時よりも心地いいと思えたのはこの能力を得てから始めての事だった。

そんなガキが、今目の前で。

「…では、私たちはこれで…。」

ゾロゾロと出て行く集団。残されたのは横たわる娘と崩れる父。
出て行く際に集団から声が聞こえた。

――やっとアイツいなくなったよ、清々した――

そんな、よしてくれ、悪い冗談だろう。

何かが吹っ切れて、涙で視界が霞む、何も見えない。見たくない。

「あれ、オジちゃんなんで泣いてるの？」

聞き覚えのある声が背中から聞こえ、振り向くとそこには
前で横たわっているはずの女の子がいた。

「あれ…お前…なんで…」

「なんでって…オジちゃんが来いって言ったから。」

はは、なんだ

思い出した、思い出したんだ。

数十年前のあの日、俺は友達と遊んで田んぼに来ていたんじゃないんだ。
俺は、クラスの催し物で主役になったんだ、そん時のメンバーの一人に

「練習するから、田んぼに来いよ。」

そう言われたんだ、そこへついて行き、殺されたんだ。
根暗が主役に立つな、たしかそんな簡単な理由だったかな。

「そういえば、まだ私の名前もいってなかったね、あいみって言うんだ。オジちゃんは？」

「あ…俺、俺は…。」

つちもぐり。罪を犯そうとする愚かしい人間から、弱い人間を救ってやる妖怪。

――妖怪、つちもぐり。

（後書き）

意見の相違や、根本的な原因の解決にならない救いがテーマ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8847l/

つちもぐり。

2010年10月14日15時41分発行